

タイトル	平安貴族の山里（山荘）について：その1 山里のイメージ・風景・四季・眺望
著者	小野，恭平； ONO, Kyohei
引用	北海学園大学学園論集(166)： 1-16
発行日	2015-12-25

# 平安貴族の山里（山莊）について

## —— その1 山里のイメージ・風景・四季・眺望 ——

小 野 恭 平

### 目次

その1 山里のイメージ・風景・四季・眺望（本号）

その2 山里の自然美・遊び・閑居・恋・修道

その3 山里の建築と庭

### 序

「住む」とは濁った水が澄むように、あちこち動き回っていたものが一か所に落ち着き、根を下ろすことである。それは家や都市が成立するための条件である。しかし住むことはまた自由を拘束し、離脱の願望をかきたてる。早くから都市文明の開けた中国には、そうした束縛から解放されるための住まいが用意されていた。隠逸のための山中の洞窟である。それは都市の貴族たちの憧れのまどだった。しかし生身の人間には厳しすぎる環境である。そこでやがて貴族たちは都市近郊に山莊を営み、擬似的に隠遁生活を演じ愉しむようになった<sup>1)</sup>。隠遁の趣味化である。こうした趣味は我国にも伝えられ、漢詩に詠まれたり<sup>2)</sup>、長屋王の佐保の茅葺・黒木造りの「山家」<sup>3)</sup>のように実際に山莊が造られ愉しまれるようになった<sup>4)</sup>。そしてこの山莊は平安時代には「やまさと（以下、山里と表記する）と呼ばれるようになり、単に隠遁の場所というだけでなく、自然美に富む遊びや恋の場所となり、また「ひとへに山里などのやうにおもしろうせんと思はば」<sup>5)</sup>とあるように「おもしろき」庭園の意匠ともされるなど、貴族たちにとってきわめて魅力的な場所になっていた。しかも山里はその後も桂山莊のような別荘や侘び茶の精神に適う場所とされるなど<sup>6)</sup>、日本文化にとって重要な場所であり続けた。

本稿はこの山里が平安時代の貴族にとってどのような魅力ある場所であったかを当時の文学作品を資料として明らかにし、日本人が住まいに何を求めてきたか、日本人の住まい観の一端を探ることを目的としている。資料とした文学作品は、和歌については『新編 国歌大観』（角川書店）の古今集から千載集までの七勅撰和歌集、および『私家集大成』（明治書院）の「中古Ⅰ」「中古Ⅱ」の私家集、物語・随筆・日記などについては新日本古典文学大系本（岩波書店）（これにない場合は旧日本古典文学大系本）、その他についてはその都度注記したものを用了<sup>7)</sup>。

なお「山里」という言葉は現代では山間にある辺鄙な「村里」という意味で用いられているが、

平安時代には山間にある「家や建築」をもさしていた<sup>8)</sup>。また「やま」も、平安時代の文学作品では須磨や桂のような海辺や河辺と言ってもいいような場所が「やまさと」と呼ばれているところから、単に隆起した地形だけでなく、「山がちな場所」や「人が住まない辺鄙な場所」をも意味していたと考えられる。

山里に関する既往の研究は少ないが、幾つか重要な論考がある。最も注目されるのは家永三郎氏の「日本思想史に於ける宗教的自然観の展開」<sup>9)</sup>である。この論文は山里の自然美が日本人の思想史に及ぼした影響について考察したものだが、この中で家永氏は山里の自然が人生の痛苦を消除してくれた（仏に代わる救済者のような存在だった）ことを指摘されている。一方、西村亨氏は『王朝人の四季』<sup>10)</sup>で、王朝人にとっては山里の淋しさが情緒であり、淋しさに耐えている山里が趣味生活の理想的な場所だったことを述べられている。また目崎徳衛氏は「歌枕と山里」<sup>11)</sup>で平安時代の貴族たちが社会の末期的症状から脱出したいという社会心理を有しており、そのことからさいはての鄙（例えば陸奥の国）に「山のあなた」的憧れを抱いており、山里はその代償だったと言われている。また笠井昌昭氏の「古代における『中央的なもの』と『地方的なもの』」<sup>12)</sup>も山里が貴族たちの抱いていた地方の名所への憧れを代償的に満たしてくれる場所だったことを指摘され、今西祐一郎氏<sup>13)</sup>も、平安時代の貴族たちが山里に惹かれたのは、彼らが帰属すべき本貫地としての「ゐなか」を喪失した都市貴族と化したからであり、山里はその「ゐなか」の補償だったからだと言われている。以上は山里の魅力を自然美や淋しさの情緒、あるいは地方の名所や「ゐなか」に見出したものだが、以下ではこれらをふまえながら更に幅広く探してみたい。

## 1. 背 景

花盛りの頃、素性法師は京の街を見晴しながら次のような歌を詠んでいる。

・見わたせば柳桜をこきまぜて宮こそ春の錦なりける（古今集、素性法師）

都の繁栄を言寿いだ歌である。しかし遠目には華やかな都も、近づいて見るとかなり様子が異なっていた。平安京は遷都以来、繰り返し早魃・地震・洪水・疫病・飢饉等にもまわられており、決して「平安」というわけではなかった。平安初期の災害だけ見ても、806年—洪水、807年—悪疫流行、808年—鴨川の氾濫と悪疫流行、818年—大飢饉と悪疫流行、と惨状が繰り返されている。しかし上級貴族たちは儀式と同族間の争いに明け暮れるばかりで、実務を担当する中下級貴族たちも固定化した家柄社会のもとで「くれふたがった」<sup>14)</sup>閉塞感に鬱屈を深めるだけだった。そのうえこの時代は仏教的厭世感が流行した時代で、憂き世意識が強く持たれるようになっていた。じっさい「憂き世」という言葉は奈良時代までの文献には一例もないが、平安時代になると急に多く見られるようになる<sup>15)</sup>。

・散ればこそいとゞ桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき（伊勢物語、82段）

・あしひきの山のまにまに隠れなむ憂き世の中はあるかひもなし（古今集、読み人しらず）

そこで人々はこうした憂き世の対極に浄土を想定し、そこへの往生を切望したのであるが、貴族

たちは憂き世から遁れるもう一つの場所を、この世の、しかも京から程遠くない場所に持っていた。それが山里であった。彼らはそこを「世の憂きよりは住みよかりけり」（古今集、よみ人しらず）と詠い<sup>16)</sup>、隠遁や修道生活、あるいは遊びや恋の格好の場所として通っていた。

## 2. 山里のイメージ

「やまさ」という言葉は日本書紀、古事記、万葉集、風土記に一例も見えず、平安時代になって初めて登場する言葉である。それはおそらく都が平城京から山紫水明の地平安京に移り、郊外の景勝地に山荘が営まれるようになると、それを詠む歌語が求められるようになったからであろう。すなわち奈良時代にも山荘はあり、「タドコロ（田荘、田庄、庄）」とか「ナリドコロ（別業、田荘）」と呼ばれていたが、それらは元来農地経営のための施設をさす言葉であり、自然美に富む山荘をさす歌語としては相応しくない。そこで漢語の「山斎・山家・山荘」などの訳語として「やまさ」という言葉が作られたのではないかと思われる<sup>17)</sup>。ちなみに「やまさ」という言葉が初めて文献に登場するのは藤原関雄（803～853）の次の歌である。

- ・山里に住みにし日より訪う人も今はあらしの山ぞ侘びしき（古今和歌六帖）
- ・宮づかへ久しうつかうまつらで山里に籠り侍りけるに詠める。——奥山の岩垣紅葉散りぬべし照る日の光見る時なくて（古今集）

いずれの歌も山里を寂しく侘しい場所と詠んでいる。関雄は『文徳天皇実録』によれば「少習属文 性好閑退 常在東山旧居 耽愛林泉 時人呼為東山進士」とあるが、薬子の妾で上皇方についた真夏の男だったためであろう、官途に恵まれず、不遇意識から東山に籠ることが長かったようである。それゆえ上の歌でも山里を、訪う人もなく嵐ばかりが訪（音）ずれる侘しい場所、陽がさすこともなく岩垣紅葉が散っていく見捨てられたような場所、と詠んでいるのだろう。平安時代の山里のイメージはおそらくこの関雄の歌に強く影響されていると思われるが、以下では古今集から千載集までの七勅撰和歌集のなかで「やまさ」の語が詠みこまれた歌 81 首<sup>18)</sup>を主な資料として、山里がどのような場所とみられていたか、そのイメージを探ってみたい。

まず「山里は寂しかりけり」とか「山里は峯の嵐のおとばかりして」のように「山里は」に続く述語に注目してみる。

「山里は」に続く述語を有する歌は 16 首あり、その述語を内容別に見ていくと次のようである。すなわち「雪ふりつみて道もなし」「ゆききの道も見えぬまで秋の木の葉にうづもれにけり」「雪こそ深くなりにつくれ」のように「雪や木の葉に埋もれて道がない」こと、つまり「人里から隔離されている」ことを言うものが 3 例ある。

- ・山里は雪ふりつみて道もなしけふこむ人をあはれとはみむ（拾遺集，251，かねもり）
- ・山里はゆききの道も見えぬまであきの木の葉にうづもれにけり（詞花集，133，曾禰好忠）
- ・山里は雪こそ深くなりにつくれ訪はでもとしの暮れにけるかな（後拾遺集，412，源頼家）

「峯の嵐のおと（音・訪）ばかりして」「野辺のさわらびもえいづる折りにのみこそ人は訪ひけれ」

「時雨ばかりぞ過ぎがてにする」「我より先に人来ざりけり」のように「訪う人がない」ことを言うものが4例。

- ・日も暮れぬ人も帰りぬ山里は峯の嵐のおとばかりして (後拾遺集, 1145, 源頼実)
- ・山里は野へのさわらびもえいづるおりにのみこそ人は訪ひけれ (金葉集二度本, 71, 権僧正永縁)
- ・ふりはへて人も訪ひこぬ山里は時雨ばかりぞすぎがてにする (千載集, 413, 二条太皇太后宮肥後)
- ・雪深き道にぞしるき山里は我より先に人こざりけり (後拾遺集, 411, 藤原経衡)

「寂しかりけり」「冬ぞ寂しさまさりける」「すむ人さへや思ひ消ゆらむ」のように「寂しさ」を言うものが3例。

- ・山里は寂しかりけりこがらしの吹く夕暮れのひぐらしの声 (千載集, 303, 藤原仲実)
- ・山里は冬ぞ寂しさまさりける人めも草もかれぬと思へば (古今集, 315, 源宗于)
- ・白雪のふりてつもれる山里はすむ人さへや思ひきゆらむ (古今集, 328, 壬生忠岑)

「秋こそことに侘びしけれ」「もの憂かるねに驚ぞなく」のように、「侘びしい」「もの足りない、あるいは満たされない」ことを言うものが2例。

- ・山里は秋こそことに侘しけれ鹿のなくねにめをさましつつ (古今集, 214, ただみね)
- ・春たてど花もにほはぬ山里はもの憂かるねに驚ぞなく (古今集, 15, 在原棟梁)

「花こそ宿のあるじなりけれ」「ゆきかふ人の心をぞみる」が2例である。

- ・春きてぞ人もとひける山里は花こそやどのあるじなりけれ (拾遺集, 1015, 右衛門督公任)
- ・梅の花垣根ににほふ山里はゆきかふ人の心をぞみる (後拾遺集, 58, 賀茂成助)

この2例のうち一首目は、春になって人が訪ねて来てくれるのは実は花が主だったからなので、というもの。花のない時は主がいなかったかのように誰も訪ねて来てくれませんでした。と、という軽い皮肉とユーモアを込めた挨拶の歌である。二首目は垣根の梅の花を旅人が見上げる屏風絵の一場面のような歌だが、「梅の花が咲く山里は見る人の心を試している」という。すなわち心ある人なら花の美しさが分かるはずだし、山里が寂しく暮らす人が住む所ということも分かっているはずだから共に花を愛でてくれるはずだが、はたしてどうでしょうか…といったものだろう。いずれも山里が「訪う人がない、人が待たれる場所である」ことを前提とした述懐である<sup>19)</sup>。

以上、16例中14例から山里は「人里から隔離された、訪う人がない、寂しく侘びしい場所」とみられていたといえよう。

もっとも残り2例で山里は「住みよかりけり」「もののわびしき事こそあれ世の憂きよりは住みよかりけり」とされている。

- ・憂き世をば峯の霞やへだつらんほ山里はすみよかりけり (千載集, 1059, 藤原公任)
- ・山里はもののわびしき事こそあれ世の憂きよりは住みよかりけり (古今集, 944, よみ人しらず)

したがってこの2例を考慮すると、山里は「人里から隔離された、寂しく侘びしい場所」だが「憂

き世よりは住みよいところもある場所」とみられていたといえるであろう。

次に「住む人もなき山里」とか「人めまれなる山里」のように「山里」を形容する修飾語に注目してみる。

山里を修飾する語は28例ある。内容別に見ていくと「訪ふ人もなき山里」「あとたえて訪ふ人もなき山里」「ふりはへて人も訪ひこぬ山里」「訪ふ人もあらじと思ひし山里」「訪ふ人もくれば帰る山里」「春きてぞ人も訪ひける山里」のように山里を「訪う人のない場所」とするものが6例ある。

- ・思ひやれ訪ふ人もなき山里のかけひの水の心細さを（後拾遺集，1040，上東門院中将）
- ・あとたえて訪ふ人もなき山里にわれのみ見よと咲ける卯の花（後拾遺集，171，藤原通宗）
- ・ふりはへて人も訪ひこぬ山里は時雨ばかりぞすぎがてにする（千載集，413，二条太皇太后宮肥後）
- ・訪ふ人もあらじと思ひし山里に花のたよりに人め見るかな（拾遺集，51，もとすけ）
- ・訪ふ人もくれば帰る山里にもろともにすむ秋の夜の月（後拾遺集，259，素意法師）
- ・春きてぞ人も訪ひける山里は花こそやどのあるじなりけれ（拾遺集，1015，右衛門督公任）

次いで「寂しさに家出しぬべき山里」「葛の葉のうら寂しげに見ゆる山里」「ゆふべ寂しき山里」のように「寂しい場所」であると言うものが3例。

- ・寂しさに家出しぬべき山里をこよひの月に思ひとまりぬ（詞花集，296，源道濟）
- ・を鹿ふすしげみにはへる葛の葉のうら寂しげに見ゆる山里（後拾遺集，1151，大中臣能宣）
- ・さらぬだにゆふべ寂しき山里の霧のまがきにを鹿なくなり（千載集，311，待賢門院堀河）

直接「寂し」とは言わないが、「をちこちの人めまれなる山里」「見る人もなき山里」「われひとりながむと思ひし山里」「住む人もなき山里」のように、「人がいない寂しい場所」であることを言うものが4例。

- ・をちこちの人めまれなる山里に家みせんと思ひきや君（後撰集，1172，よみ人しらず）
- ・見る人もなき山里の桜花ほかの散りなん後ぞ咲かまし（古今集，68，伊勢）
- ・われひとりながむと思ひし山里に思ふことなき月もすみけり（後拾遺集，834，藤原為時）
- ・すむ人もなき山里の秋の夜は月の光も寂しかりけり（後拾遺集，258，藤原範永）

「いとどしくもの思いまさる山里」が1例である。

・なにしかは人も来てみんいとどしくもの思ひまさる秋の山里（後拾遺集，334，いづみしきぶ）

一方、「雪消えがたき山里」「霞こめたる山里」のように山里の自然の状態を示す例が9例ある。このうち6例は「白雪の降りてつもれる山里」「雪降りて道ふみまどふ山里」「雪消えぬ山里」「降りつもる雪消えがたき山里」「霞こめたる山里」「春はまづ霞にまどふ山里」のように山里が「雪や霞に閉ざされていること」すなわち「人里から隔離された場所」であることを言うものである。

- ・白雪の降りてつもれる山里はすむ人さへや思ひ消ゆらむ（古今集，328，壬生忠岑）

- ・雪降りて道ふみまどふ山里にいかにしてかは春のきつらん (後拾遺集, 7, 平兼盛)
- ・鶯の声なかりせば雪消えぬ山里いかで春をしらまし (拾遺集, 10, 中納言朝忠)
- ・降りつもる雪消えがたき山里に春をしらす鶯の声 (後拾遺集, 21, よみ人しらず)
- ・思ひやれ霞こめたる山里の花まつほどの春のつれづれ (後拾遺集, 66, 上東門院中将)
- ・春はまづ霞にまどふ山里をたちよりてとふ人のなきかな (後拾遺集, 40, 選子内親王)

一方9例中3例は「春たてど花もにほはぬ山里」「ひぐらしのなく山里」「柴折りくぶる冬の山里」で、山里が「春になっても花が咲かない侘しい場所、ひぐらしが鳴く寂しい場所、寂しさに堪えない場所」であると言う。

- ・春たてど花もにほはぬ山里はもの憂かるねに鶯ぞなく (古今集, 15, 在原棟梁)
- ・ひぐらしのなく山里の夕暮れは風よりほかにとふ人もなし (古今集, 205, よみ人しらず)
- ・寂しさに煙をだにもたてじとて柴をりくぶる冬の山里 (後拾遺集, 390, 和泉式部)

以上、28例中23例から山里は「人里から隔離された、寂しく侘びしい場所」とみられていたといえよう。

ところが、この他「梅の花垣根ににほふ山里」「卯の花に冬ごもれりと見ゆる山里」「秋の田に紅葉散りける山里」のように「自然が美しい場所」であることを言うものが3例ある。

- ・梅の花垣根ににほふ山里はゆきかふ人の心をぞみる (後拾遺集, 58, 賀茂成助)
- ・雪とのみあやまたれつつ卯の花に冬ごもれりと見ゆる山里 (後拾遺集, 177, 源道済)
- ・秋の田に紅葉散りける山里をこともおろかに思ひけるかな (千載集, 378, 源俊頼)

山里が寂しさ・侘びしさの中にも季節の自然に彩られた情趣ある場所としてイメージされていたことがわかる。

また「身を隠すべき山里」「としをへてかよひなれにし山里」が2例ある。

- ・すみわびて身をかくすべき山里にあまりくまなき夜はの月かな (千載集, 988, 皇太后宮大夫俊成)

- ・としをへてかよひなれにし山里の門とふばかり咲ける卯の花 (金葉集三奏本, 105, 源相方)

これらは山里が「憂き世にすみわびて身を隠す場所」あるいは「長年、通いなれた場所」であると言うものだが、歌の内容から判断すると、住みにくい憂き世から遁れた場所、あるいは大きく育った卯の花に囲われた隠れ家のような場所としてイメージされたものであろう。

以上、「山里は」に続く述語や「山里」を限定する修飾語から、山里は「人里から隔離された寂しく侘びしい場所」だが、一方で「自然が美しい」「住みよいところもある憂き世の外」のような場所としてイメージされていたことがわかる。

### 3. 山里の風景

山里は『枕草子』(112段)に「(絵に)描きまさりするもの」の例として松の木・秋の野・山道とともにあげられている。だから文学作品の中でも実際の風景より美化されていたと思われるが、

以下ではその大凡を見てみる。

山里は必ずしも山中にあるわけではないが、『作庭記』に「ひとへに山里などのやうにおもしろうせんと思はば、高き山を屋近く設けて、その山の頂より裾ぎまへ石を少々立て下して」束や柱を立てるようにすべきだと述べられているから、山里らしい地形としてはやはり傾斜地が典型的だったようである。じっさい文学作品の中の山荘は「山に片懸けて」とか「峰に片懸けて」と表現されるものが多い。これは床が斜面から前方にはり出した懸け造りである。

- ・かの夕霧の宮す所のおはせし山里よりは、今すこし入りて、山に片懸けたる家なれば、松風しげく、風の音もいと心細きに（源氏物語、手習、小野の尼の山荘）
- ・山の片添に山荘の様に造りたる所有り（今昔物語、巻27）

山荘の近くには谷川が流れ、滝の音や木々を渡る風の音、鹿の声が「あはれに」「心すごく」聞こえていた。

- ・そのわたりは比叡、坂本、小野のわたり、音羽川近く、滝の音、水の声あはれに聞こゆる所なり（宇津保物語、忠こそ、右大臣橘千陰の隠棲する所）
- ・秋風寒く、山の滝心すごく、鹿の音はるかに聞こえ、御前の草木、或るは色のさかり、或るは花の散りなどしてあはれなるに（宇津保物語、菊の宴、実忠の北の方が隠れ住む志賀の山もと）
- ・山の陰は小暗き心ちするに、ひぐらしの鳴きしきりて、垣ほに生ふる撫子のうちなびける色もをかしよう見ゆ。前の前裁の花どもは心にまかせて乱れあひたるに、水の音いとすゞしげにて、山おろし心すごく、松の響き木深く聞こえわたされなどして（源氏物語、夕霧、一条御息所の小野の山荘）
- ・仁和寺にすませ給ひけるころ、いつまできてはなど都よりたづね申したりければよませ給ひける——かくてしもえすむまじき山里の細谷川の心細さに（金葉集二度本、532、三宮）

なかでも松風の音や鐘の音、あるいは笈の水が寂しさ・心細さをかきたてていた。

- ・いづこにも秋は来ぬれど山里の松吹く風はことにぞありける（大納言公任集）
- ・さらぬだに心細きを山里の鐘さへ秋の暮れをつぐなり（千載集、382、前大僧正覚忠）
- ・思ひやれとふ人もなき山里の笈の水の心細さを（後拾遺集、1040、上門院中将）
- ・山里の笈の水のこほれるはおとときよりも寂しかりけり（千載集、1103、輔仁のみこ）
- ・山里の寂しき宿のすみかにも笈の水のとくるをぞ待つ（千載集、1104、聡子内親王）

山荘の庭は柴垣や卯花垣のような田舎家風の垣で仕切られ、風情を添えるものとして梅や撫子・女郎花などが垣根にそって植えられていた。

- ・はかなき小柴垣も故あるさまにしなして、かりそめなれどあてはかに住まひなし給へり。（源氏物語、夕霧、一条御息所の小野の山荘）
- ・垣ほに植ゑたる撫子もおもしろく、女郎花、桔梗など咲き始めたるに（源氏物語、手習、小野の尼の山荘）

- ・山里の垣根の梅は咲きにけりかばかりこそは春もにほはめ (千載集, 468, 天台座主明快)
- ・梅の花垣根ににほふ山里はゆきかふ人の心をぞみる (後拾遺集, 58, 賀茂成助)
- ・いづれをか分きてとはまし山里の垣根つづきに咲ける卯の花 (金葉集二度本, 99, 大蔵卿匡房)

垣根の外には山田が広がっていた。

- ・山里のそとの小田の苗代に岩間の水をせかぬ日ぞなき (金葉集二度本, 75, 藤原隆資)
- ・山里の門田の稲のほのぼのと明くるもしらず月を見るかな (金葉集二度本, 215, 中納言顕隆)

秋には引板が渡されたが、鹿は驚く様子もなく、籬のもとにたたずんでいた。

- ・人のけはひいと少なう、木枯らしの吹き払ひたるに、鹿はたゞ籬のもとにたゞずみつゝ、山田の引板にもおどろかず、色濃き稲どもの中にまじりてうち鳴くも、愁へ顔なり、滝の声は、いとゞ物思ふ人をおどろかし顔に、耳かしがましようとゞろき響く。草むらの虫のみぞ、より所なげに鳴きよはりて、枯れたる草の下より竜胆のわれひとりのみ心ながう這ひ出でて露けく見ゆるなど (源氏物語, 夕霧, 一条御息所の小野の山荘)
- ・中将隆房八条の家に内の女房あまた見にゆきたるに、門田おもしろくて鳴子かけなどしたり。見遊びて立ちかへり、これより——ほのみつる門田の稲に綱はへてしかいとはずば又もゆかばや (太皇太后宮小侍従集)<sup>20)</sup>

山荘には細い山道が通じていたが、秋は蔦草に閉ざされ、冬は雪に埋まった。

- ・山里はまれの細道あとたへてまさきのかづらくる人もなし (匡房集)
- ・ふる雪にまれの細道うづもれてあとたへまさる冬の山里 (六条院宣旨集)

以上が山里の風景の骨格である (建築については「その3」でとりあげる)。次にこうした風景に季節の自然が配された四季の風景を見てみる。

#### 4. 山里の四季

古今集から千載集までの勅撰和歌集の中で「やまさと」の語が詠み込まれた歌は81首ある。そこで詠まれた自然の景物を季節ごとに分類すると次のようになる (数字は出現度数を示す)。

春…花 (6), 鶯 (5), 霞 (4), 梅花 (2), さわらび (1), 柳 (1)

夏…卯の花 (5), ほととぎす (4)

秋…月 (7), 鹿 (6), 風・嵐 (6), 紅葉 (5)・木の葉 (2), 萩・芒 (2), ひぐらし (2), 葛の葉 (2), 露 (2), 時雨 (1), 霧 (1), 稲 (1)

冬…雪 (12), つらら (1), 枯れ草 (1), 雪に埋もれた垣根の竹 (1)

これを見ると、歌に詠まれた自然の種類が意外と少ないことに気付く。自然が豊かなはずの山里だが、四季の風景のイメージはかなり類型的だったことがわかる<sup>21)</sup>。次にその風景を季節ごとに見てみる。

## 春

山里の春は霞に籠められ、花も咲かない。しかし霞の隙間から見える柳の末に春が訪れたことがわかる。

- ・思ひやれ霞こめたる山里の花まつほどの春のつれづれ（後拾遺集，66，上東門院中将）
- ・山里の家ゐは霞こめたれど垣根の柳すゑはとに見ゆ（拾遺集，1031，弓削嘉言）

しかし霞に閉ざされた山里を訪う人はなく、花も咲かないので鶯も姿を見せず、鳴く声も侘しげである。

- ・春はまづ霞にまどふ山里をたちよりてとふ人のなきかな（後拾遺集，40，選子内親王）
- ・山里も憂き世のなかをはなれねば谷の鶯ねをのみぞ鳴く（金葉集二度本，517，摂政左大臣）
- ・春たてど花もにほはぬ山里はもの憂かるねに鶯ぞなく（古今集，15，在原棟梁）

やがて垣根の梅の花が咲く。

- ・山里の垣根の梅は咲きにけりかばかりこそは春もにほはめ（千載集，468，天台座主明快）
- ・梅の花垣根ににほふ山里はゆきかふ人の心をぞみる（後撰集，58，賀茂成助）

鶯も鳴き始める。

- ・山里の垣根に春やしるからんかすまぬ先に鶯の鳴く（千載集，6，大納言隆国）
- ・ふりつもる雪消えがたき山里に春をしらす鶯の声（後拾遺集，21，よみ人しらず）
- ・鶯の声なかりせば雪消えぬ山里いかで春を知らまし（拾遺集，10，中納言朝忠）

そして桜が咲き、花見や蕨採りの人の姿も見えるようになる。

- ・とふ人もあらじと思ひし山里に花のたよりに人め見るかな（拾遺集，51，もとすけ）
- ・春きてぞ人もとひける山里は花こそやどのあるじなりけれ（拾遺集，1015，右衛門督公任）
- ・山里は野辺のさわらび萌えいづるおりにのみこそ人はとひけれ（金葉集二度本，71，権僧正永縁）

桜はしかし見る人もなく散り、花のない時よりいっそう人が待たれた<sup>22)</sup>。

- ・山里に散りはてぬべき花ゆゑにたれとはなくて人ぞまたるる（後拾遺集，135，源道濟）

だから次のような歌も詠まれた。

- ・衛門の御息所の家うづまさに侍りけるに、そこの花おもしろかなりとて折りにつかはしたりければ、きこえたりける — 山里に散りなましかば桜花にほふさかりもしられざらまし（後撰集，68，藤原師尹）

また他の花が散った後に我が山荘の花が咲いてくれればいいのに、とも思われた。

- ・見る人もなき山里の桜花ほかの散りなん後ぞ咲かまし（古今集，68，伊勢）

## 夏

夏は垣根の卯の花が雪のように咲いた<sup>23)</sup>。

- ・卯の花のよそめなりけり山里の垣根ばかりにふれる白雪（千載集，143，賀茂政平）
- ・雪とのみあやまたれつつ卯の花に冬ごもれりと見ゆる山里（後拾遺集，177，源道濟）

ほととぎすの声も都のように待つこともなく存分に聞くことができた<sup>24)</sup>。

- ・山里のかひもあるかなほととぎす今年ぞまたで初音ききつる (後拾遺集, 1229, 大江嘉言)
- ・山里にやどらざりせばほととぎす聞く人もなきねをやなかまし (拾遺集, 99, よみ人しらず)

## 秋

秋は紅葉が山里を美しく彩り、紅葉狩りの人が訪れた。

- ・見わたせば紅葉しにけり山里にねたくぞけふはひとりきにける (後拾遺集, 341, 源道濟)
- ・山里の紅葉見にとや思ふらん散りはててこそ訪ふべかりけれ (後拾遺集, 359, 前大納言公任)

特に秋の田に散る紅葉や稲田の上に昇る月の美しさは格別だった。

- ・秋の田に紅葉散りける山里をこともおろかに思ひけるかな (千載集, 378, 源俊頼)
- ・山里の門田の稲のほのほのとあくもしらず月を見るかな (金葉集二度本, 215, 中納言顕隆)

しかし山里の秋は寂しく、時雨が降り、草葉の露が山里人の涙を暗示しているようだった<sup>25)</sup>。

- ・紅葉散る頃なりけりな山里のことぞともなく袖のぬるるは (後拾遺集, 361, 清原元輔)
- ・ふりはへて人も訪ひこぬ山里は時雨ばかりぞすぎがてにする (千載集, 413, 二条太皇太后宮肥後)
- ・公実卿中将にてはべりける時、人々ぐして小野のわたりに紅葉見ありきけるに、おくりてはべりける——山里の秋のけしきも見ぬ人に来てだにかたれつゆもおとさず (金葉集三奏本, 251, 前皇后宮美作)

また「萩・芒」がなびく景色、「葛の葉」が這いかかり、葉裏を見せて風にもまれる姿、あるいは「木の葉」が嵐に散り山道を埋めていく眺めも秋のもの哀しさをさそった。

### <萩・芒>

- ・山里の物寂しきは萩の葉のなびくごとにぞ思ひやらるる (後撰集, 266, 左大臣)
- ・秋きぬと風もつげてし山里になほほのめかすはな芒かな (千載集, 245, 法印静賢)

### <葛の葉>

- ・おのづから秋はきにけり山里の葛はひかかる槇の伏せ屋に (金葉集二度本, 170, 大納言経信)
- ・を鹿ふすしげみにはへる葛の葉のうら寂しげに見ゆる山里 (後拾遺集, 1151, 大中臣能宣)

### <木の葉>

- ・神な月ねざめにきけば山里の嵐の声は木の葉なりけり (後拾遺集, 384, 能因法師)
- ・山里はゆききの道の見えぬまであきの木の葉にうづもれにけり (詞華集, 133, 曾禰好忠)

しかも夕暮れになると「ひぐらし」の声や妻恋になく鹿の声が哀しげに聞こえ、「嵐の音」が寂しさを痛感させた。

### <ひぐらしの声>

- ・ひぐらしのなく山里の夕暮れは風よりほかに訪う人もなし (古今集, 205, よみ人しらず)
- ・山里は寂しかりけりこがらしの吹く夕暮れのひぐらしの声 (千載集, 303, 藤原仲実)

〈鹿の声〉<sup>26)</sup>

- ・このごろは木々の梢に紅葉してしかこそはなけ秋の山里（後拾遺集，344，上東門院中将）
- ・さらぬだに夕べ寂しき山里の霧のまがきにを鹿なくなり（千載集，311，待賢門院堀河）

〈嵐の音〉

- ・日も暮れぬ人も帰りぬ山里は岑の嵐のおとばかりして（後拾遺集，1145，源頼実）
- ・山里のしづの松垣ひまをあらみいたくな吹きそこがらしの風（後拾遺集，340，大宮越前）

見る人もない山里の秋の夜は月の光も寂しげだった。

- ・すむ人もなき山里の秋の夜は月の光も寂しかりけり（後拾遺集，258，藤原範永）

しかしその澄んだ光は見飽きることがなく，強く魅せられた<sup>27)</sup>。

- ・すみわびて身を隠すべき山里にあまりくまなき夜はの月かな（千載集，988，皇太后宮大夫俊成）
- ・寂しさに家出しぬべき山里をこよひの月に思ひとまりぬ（詞花集，296，源道濟）

月は孤独な山里に澄む（住む）唯一の友だった。

- ・とふ人もくれば帰る山里にもろともにすむ秋の夜の月（後拾遺集，259，素意法師）
- ・われひとりながむと思ひし山里に思ふことなき月もすみけり（後拾遺集，834，藤原為時）

冬

冬は人目だけでなく草もかれ，垣根も道も雪に埋もれ凍りついた<sup>28)</sup>。

- ・山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草もかれぬと思へば（古今集，315，源宗于朝臣）
- ・山里の垣根は雪にうづもれて野べとひとつになりけるかな（千載集，457，右のおほいまうちぎみ）
- ・ふる雪に軒ばの竹もうづもれて友こそなけれ冬の山里（千載集，462，読人不知）
- ・山里のおもひかけぢにつららゐてとくる心のかたげなるかな（金葉集二度本，695，左京大夫経忠）

わずかに柴を折りくべる煙だけが空に細くたち昇っていた。

- ・山里の柴をりをりにたつ煙人まれなりと空にしるかな（千載集，1092，二条太皇太后肥後）
- ・寂しさに煙をだにもたてじとて柴をりくぶる冬の山里（後拾遺集，390，和泉式部）

そしてひたすら春が待たれた。

- ・春やくる人やとふともまたれけりけさ山里の雪をながめて（後拾遺集，410，赤染衛門）
- ・雪ふりて道ふみまどふ山里にかにしてかは春の来つらん（後拾遺集，7，平兼盛）

しかし春になり雪が解けはじめると惜しい気もした。雪に閉ざされた間は孤独に苦しめられたが，一方では憂き世との交渉を絶つことができたからだろう。

- ・道たゆといとひしものを山里に消ゆるは惜しきこそぞの雪かな（千載集，4，前中納言匡房）

このように山里は夏を除けば常に寂しさに満たされていた。しかしそうでありながらなお住みよいというのは，例えば「すみわびぬ今はかぎり山里につま木こるべきやど求めてむ」（後撰集，

1083, 業平朝臣)のように、そこが住みにくい憂き世から遁れることができる場所だったからか、あるいは寂しさ故に「あはれ」深い美的な世界だったからか、ともかくそこに貴族たちを惹きつける様々な魅力があったからである。以下ではまずその一つとして眺望を取り上げる。

## 5. 山里の眺望

ベルツによれば日本人は眺望(みはらし)を好まない民族だと言う<sup>29)</sup>。例えば山荘を造る場合でも、欧米人は見晴らしを重視するが、日本人はむしろ山に籠るほうを好むと言うのである<sup>30)</sup>。しかし日本人も眺望を好んだ。少なくとも平安時代の貴族たちは眺めのよい山荘を造っていた。しばしば取り上げるが『作庭記』に次のような記述がある。

- ・ひとへに山里などのやうにおもしろうせんとおもはば、たかき山を屋ちかくまうけて、その山のいただきよりすそぎまへ、石をせうせうたてくたして、(中略)そのうゑ、もしは石のかたかどなんどに、つかはしらをも、きりかけたるていにすべきなり。

庭を山里のように「おもしろう」しようと思えば、山を築き、その山の斜面に石を据え、そこに柱・束を立てるようすべきだと言うのである。このことは山荘が斜面に片懸けた造りになっていて、前方が高床になった眺めのよい山荘だったことを示している。文学作品にも山荘からの眺めが優れていたことを示す例がある。

- ・東は、野のはるばるとあるに、ひむがしの山ぎはは、比叡の山よりして、稲荷などいふ山まであらはに見えわたり、南は、双の丘の松風、いと耳近う心細く聞こえて、内には、いたゞきのもとまで、田といふものの、引板ひき鳴らす音など、ゐ中の心地していとをかしきに、月のあかき夜などはいとおもしろきを、ながめあかし暮らすに(更級日記、西山の山荘)
- ・端の方に立出でて見れば、遙かなる軒端より、狩衣姿色々に立ちまじりて見ゆ(源氏物語、手習、小野の尼の山荘)

『更級日記』の一節は、作者が一時期住んだことがある西山の山荘からの眺めである。東方を見ると遙々と野が広がり、比叡山から稲荷山まで見渡せる。南には双が岡の林があり、松風の音が蕭々と聞こえる。西には山田が続き、引板の音が聞こえてくる。まるで昔住んでいた東国の田舎のようで、月が明るい夜などは見飽きることがないという。一方『源氏物語』の一節は「遙かなる」に係る言葉が省略されているようで、いまひとつ意味が明確でないが、「端のかた」つまり簀子縁の辺に立つと、遙か遠くまで見晴らせる軒端の向こうに山路を登ってくる狩衣姿の一行がはっきり見えるというのであろう。いずれも高い視点から見晴らしがきく造りになっていたことが推察される<sup>31)</sup>。

平安時代は庭園でも眺望が重視されていた。『作庭記』の山里風の庭がそうだったし、『今鏡』(藤波の上)には『作庭記』の著者とされる橘俊綱と白河院の次のようなエピソードが記されている。

俊綱と院が、何処の庭園がもっとも興味あるかを論じあった時のことである。院は石田殿(琵琶

琵琶湖の眺望に優れていた）、高陽院（二町四方を占める頼通の邸で、『栄華物語』によれば「絵などよりは見所あり、おもしろく」と評されていた）と順に挙げていき、次いで自身の鳥羽殿を挙げた。しかし俊綱は、鳥羽殿は「地形眺望など、いと無き所なり」として退け、かわって自分の伏見の山荘をあげたという。鳥羽殿には広大な水面があったが、眺望が平坦で変化に乏しいというのである。その点、伏見の山荘は変化に富む田園風景を見晴らすことができたようで、後世の記事だが、『増鏡』に次のように記されている<sup>32)</sup>。

・野山のけしき色づきわたるに、伏見山、田の面につゞく宇治川の川浪、はるばると見渡されたるほど、いと艶あるを、若き人々など、身にしむばかり思へり（増鏡、老いのなみ）  
澄みきった秋の気の中紅葉した野山、広々と続く黄金色の稲田、その間を流れる宇治川の輝きなどが見渡せ、非常に風情があり、若い人たちは身にしみるほど感動したという。

要するに日本人もこのように眺望を好んだのだが、では貴族たちにとって眺望の魅力とはどのようなものであったか。

先の小野の山荘の女たちは中將一行が山道を登ってくるのを簀子まで出て見ている。こうした大胆な行動がとれたのは、周りが木立ちに囲われ、木々の間から向こうは見えるが、向こうからはこちらが見えなかったからであろう。アブルトンによれば<sup>33)</sup>このような環境はロレンツの言う「敵に見られないで見ることができる」環境で、動物行動学的には防衛上最も有利な環境であり、しかもそのことから人に安心感を与え、快く・美しいと感じさせる景観でもあるという。平安貴族にとってもこうした安心感や美が眺望の魅力だったであろう。

しかし平安時代の文学作品からはもう一つの魅力が指摘できるように思われる。すなわち広々とした眺めによって見る人の心が伸びやかになる、あるいは晴れやかになる点である。

『蜻蛉日記』の作者は広々とした眺めによって心が伸びやかになる経験を次のように記している。

・賀茂に詣づ。「しのびてもろともに」と言ふ人あれば、「なにかは」とて詣でたり。いつもめづらしき心ちするところなれば、今日も心のばはる心ちす。田かへしなどするも、かう強ひけるはと見ゆ。（蜻蛉物語、天禄三年）

作者は兼家との結婚生活に鬱々とした日々を送っており、時折そうした気鬱や怒りの感情から逃げるように物詣でに出かける。この時も神経をすり減らしながら思い詰めた状況から脱すべく出かけたのだろう。広々とした賀茂の辺りの田園風景を見て「心のぼふる（心が伸び広がる）」のを感じている。そして心に余裕が生まれたからであろう、いつもなら気にもかけない田夫の農作業（新田返し）にも目が行き、こんなにも苦勞しているのだなど、その大変さを思いやっている。

一方、広々とした風景を見ると心が開放され、心の抑圧から解放されることもあった。

『蜻蛉日記』の作者は天禄元年夏、やはりやりきれない気持ちが自分ではどうしようもなくなり、「心もものべがてら」唐崎へ出かけた。作者はわずかな共人だけを従えて暗いうちに京を出発し、鴨川を渡り、逢坂の関を越え、ようやく琵琶湖が見えてきた時の感動を次のように記している。

- ・関の山路、あはれあはれと覚えて、行く先を見やりたれば、ゆくゑも知らず見えわたりて、鳥の二つ三つゐると見ゆるものを、しみて思へば釣舟なるべし。そこにてぞ、え涙はとゞめずなりぬる。いふかひなき心だにかく思へば、ましてこと人はあはれと泣くなり。はしなきまで覚ゆれば、目も見合せられず(蜻蛉日記、天禄元年六月)

鬱蒼と木々が生い茂る暗い山路を登りきって前方を見ると、遙か彼方まで湖面が広がり、そこに水鳥が二、三羽浮かんでいる、と見るとそれは小さな釣り舟だった。そのとき突然、とめどもなく涙が溢れてきたという。明るく広大な琵琶湖の風景を見て心が一気に開放され、これまで内に押し込めていた悲しみが堰をきったように流れ出したのであろう。作者はおそらくこのカタルシスによって浄化され、賀茂詣での時よりさらに深く慰められただろう。

眺望の最大の魅力はこのように広々とした眺めによって心が晴れやかになる、あるいは心の抑圧から解放される点にあったように思われる。それはささやかな束の間の気晴らしでしかなかったかもしれないが、「くれふたがった」心には一つの救いだったであろう。

## 注

- 1) 隠逸の住まいについては大室幹雄『園林都市』(三省堂、1985年)参照。
- 2) 例えば山斎を詠んだ次のような詩。「宴飲山斎に遊び、遨遊野池に臨む。雲岸寒猿嘯き、霧浦柀声悲し。葉落ちて山逾静けく、風涼しくして琴益微けし。各朝野の趣を得たり、攀桂の期を論らふこと莫れ。」(懐風藻、山斎、中臣朝臣大島)
- 3) 『懐風藻』の「初春於左僕射長王宅讌」(百済公和麻呂)に「鶉衣野坐を追ひ 鶴蓋山家に入る」とある。
- 4) 『万葉集』巻八に「はだすすき尾花逆葺き黒木もち造れるいへは萬代までに」(元正天皇)と詠まれた「いへ(室)」は、この山家であろう。
- 5) 田村剛訳注『作庭記』(相模書房、1964年)
- 6) 利休は侘び茶の精神を示す歌として藤原家隆の次の歌をあげたという。「花をのみ待つらむ人に山里の雪間の草の春を見せばや」(南方録覚書)
- 7) 資料の引用に際しては適宜句読点や濁点を施し、仮名を漢字に改めた。
- 8) 「やまさと」が建築をもさしていたことは次の例からもわかる。
  - ・男の来むとて来ざりければ——山里の真木の板戸も鎖さざりきたのめし人を待ちし宵より(後撰集、読み人しらず)
  - ・仁和寺に花園といふ所に山里作りいだして通ひ給ひき。(今鏡、月のかくるゝ山のは)  
「真木の板戸」は「建築」の建具であり、「作りいだ」したのも「村里」ではなく「建築」であろう。
- 9) 家永三郎「日本思想史に於ける宗教的自然観の展開」(『宗教的自然観の展開』齋藤書店、1947年)
- 10) 西村亨『王朝人の四季』(講談社、1979年)
- 11) 目崎徳衛「歌枕と山里」(『國文学』學燈社、1976年6月)
- 12) 笠井昌昭「古代における『中央的なもの』と『地方的なもの』」(『日本思想史』第三号、ペリかん社、1977年)
- 13) 今西祐一郎「山里」(『國文学』學燈社、1983年12月)
- 14) 『大鏡』第六卷
- 15) 橋本峰雄『「うき世」の思想』(講談社、1977年)
- 16) ・山里はもののわびしき事こそあれ世の憂きよりはすみよかりけり(古今集、944、よみ人しらず)

- 17) 「やまさと」が「山家・山莊」に対応する訳語だったことは、例えば『和漢朗詠』で「山家」題の漢詩を和歌に翻案した歌として次の歌があげられていることから推察できる。
- ・山里はものさびしかることこそあれ世の憂きよりは住みよかりけり（古今集、よみ人しらず）
  - ・山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば（古今集、源宗于）
- 18) 次の81首である。数字は『新編 国歌大観』の歌番号を示す。
- 古今集 15, 68, 205, 214, 315, 328, 944  
 後撰集 68, 266, 589, 1083, 1172, 1354  
 拾遺集 10, 51, 98, 99, 251, 1015, 1031  
 後拾遺集 7, 21, 40, 58, 66, 135, 171, 177, 248, 258, 259, 334, 340, 341, 344, 359, 361, 384, 390, 410, 411, 412, 834, 878, 1040, 1145, 1151, 1229  
 金葉集二度本 71, 75, 99, 170, 215, 517, 532, 695（異本歌）  
 金葉集三奏本 105, 251  
 詞花集 58, 133, 296  
 千載集 4, 6, 101, 143, 245, 303, 311, 319, 378, 382, 413, 448, 457, 462, 468, 988, 1059, 1092, 1103, 1104
- 19) 「山里は」に続く述語を有する歌ではないが、山里が人の待たれる場所であることは次のような歌でも詠まれている。
- ・男の来むとて来ざりければ——山里の横の板戸もささざりきたのめし人を待ちし宵より（後撰集、589、よみ人しらず）
  - ・わづらひて山寺に侍りける頃、人のとひて侍りけれど、またもおとせずなりにければ——山里をたづねてとふと思ひしはつらき心をみするなりけり（後拾遺集、878、中務典侍）
- 20) 八条は京の内だが、人家が疎らで、稲田が広がる山里めいた所だったようである。『夜の寝覚』（巻一）の主人公が方違に出かけた九条の家も「山里めかしく、おもしろき所」だった。
- 21) 私家集の歌をみても同様である。千載集までの七勅撰和歌集と『私家集大成』の「中古Ⅰ」「中古Ⅱ」の「やまさと」の語が詠み込まれた歌424首に詠みこまれた自然を調べると次のようであった。出現度数2度以下のものは一覧表から除いているが、葦・螢・女郎花・うづら・猿・あけび・雉などで、種類は少ない。
- 春…花 (49)、鶯 (23)、梅 (15)、霞 (11)  
 夏…卯の花 (26)、ほととぎす (22)、むら草 (9)、雲 (7)、雨 (6)  
 秋…紅葉 (29)・木の葉 (12)、月 (28)、鹿 (18)、風 (17)・嵐 (12)  
 時雨 (11)、葛の葉 (8)、霧 (8)、萩・芒 (4)、菊 (4)、虫の声 (4)、ひぐらしの声 (3)  
 冬…雪 (49)、あられ (5)
- 22) もっとも花が庭に散り敷いたところが素晴らしいという見方もあったが。
- ・花のみな散りての後ぞ山里のはらはぬ庭はみるべかりける（千載集、101、前大納言俊実）
- 23) 本文に引用した歌以外に次のような歌もある。
- ・としをへてかよひなれにし山里の門訪ふばかり咲ける卯の花（金葉集三奏本、105、源相方）
  - ・いづれをかわきて訪はまし山里の垣根つづきに咲ける卯の花（金葉集二度本、99、大蔵卿匡房）
  - ・あとたえて訪ふ人もなき山里にわれのみ見よと咲ける卯の花（後拾遺集、171、藤原通宗）
- 24) 本文に引用した歌以外に次のような歌もある。
- ・山里にしる人もがなほととぎす鳴きぬと聞かばつげに来るがに（拾遺集、98、つらゆき）  
 もっとも、せっかく山里を訪ねても偶に聞けないこともあった。
  - ・山里のかひこそなけれほととぎす都の人もかくや待つらむ（詞花集、58、道命法師）
- 25) 山里の露けさを詠んだ歌には本文に引用した歌以外に次のような歌もある。
- ・中原の宗興が美濃の国へまかりくだり侍りけるに、みちに女の家をやどりて、いひつきて去りがたくおぼえければ、二三日侍りて、やむごとなき事によりてまかりたちければ、衣をつつみて、それ

- がうへにかきておくり侍りける一山里の草ばの露はしげからんみのしろ衣ぬはずともきよ(後撰集, 1354, 中原宗興)
- 26) 本文に引用した歌以外に次のような歌もある。
- ・山里は秋こそことにわびしけれ鹿のなくねに目をさましつつ(古今集, 214, ただみね)
  - ・山里のあかつきがたの鹿のねは夜はのあはれのかぎりなりけり(千載集, 319, 法印慈円)
  - ・を鹿ふすしげみにはへる葛の葉のうらさびしげに見ゆる山里(後拾遺集, 1151, 大中臣能宣)
- 27) 本文に引用した歌以外に次のような歌もある。
- ・いそぎつつわれこそきつれ山里にいつよりすめる秋の月ぞも(後拾遺集, 248, 藤原家経)
- 28) 本文に引用した歌以外に次のような歌もある。
- ・白雪のふりてつもれる山里はすむ人さへや思ひきゆらむ(古今集, 328, 壬生忠岑)
  - ・山里は雪こそ深くなりにつれ訪はでもとしのくれにけるかな(後拾遺集, 412, 源頼家)
  - ・消ゆるをや都の人は惜しむらんけさ山里にはらふ白雪(千載集, 448, 藤原清輔)
  - ・山里は雪ふりつみて道もなしけふこむ人をあはれとは見む(拾遺集, 251, かねもり)
  - ・雪深き道にぞしるき山里は我より先に人来ざりけり(後拾遺集, 411, 藤原経衡)
- 29) ベルツは宮内省の御用掛だったドイツ人医師。『ベルツの日記』(岩波書店, 1979年)
- 30) じっさいベルツは眺望好きだったようで、彼の箱根の山荘は「ミハラシ」という名が付けられ、富士を望む「全山で最も景色のよい場所」にあったという。
- 31) なお山荘は川辺に建てられる場合でも「年ごろ経つる海面におぼえたる」(源氏物語, 薄雲, 大井の山荘)とか「宇治橋のはるばると見渡さるる」(源氏物語, 浮舟, 宇治の山荘)のように広々とした眺望のきく場所に建てられていた。
- 32) この山荘はその後焼けているが、眺めの良い名園だったからであろう、以後も受け継がれ、『増鏡』の記事の頃(弘安元年九月)には持明院統の院の御所になっていた。
- 33) ジェイ・アプルトン(菅野弘久訳)『風景の体験』(法政大学出版局, 2005年)